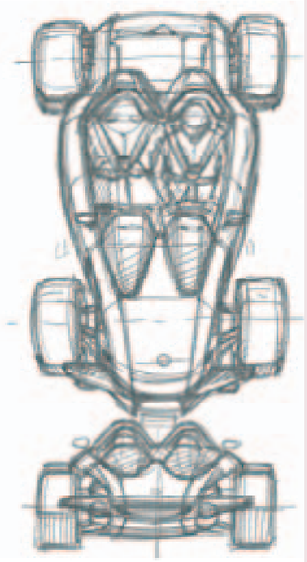
予告 Future Event

2007年度企画展

奥山清行展

名古屋芸術大学 デザイン学部 2007年度特別客員教授

フェラーリから鉄瓶まで ーそしてこれから



開発中のジュネーブモーターショー(2008) コンセプト・カー

2007年11月3日土 ▷ 20日火

12:00ー18:00(最終日は17:00まで)日曜日休館

名古屋芸術大学アート&デザインセンター［入場無料］

主催：名古屋芸術大学アート&デザインセンター／名古屋芸術大学デザイン学部
後援：株式会社国際デザインセンター／名古屋芸術大学後援会
協力：株式会社モディー／株式会社村上商会／東京電力株式会社／富士重工業株式会社／日本 SGI 株式会社

編集後記

なかなか終わらなかった夏。いつ秋が来るのだろうと思いながら気がつけば秋の展覧会シーズンに突入していました。学内では芸大祭の準備が始まり、なんだか皆そわそわしています。センターの企画展準備に追われながらも、あちこちで開催中の興味深い展覧会やイベントに心が浮き立つ日々です。

関連イベント

KEN OKUYAMA Design Talk

奥山清行デザイントーク

「フェラーリから鉄瓶まで／日本とイタリアのものづくり」

2007年11月3日土 13:30ー16:00(13:00開場)

名古屋芸術大学西キャンパスB棟大講義室(要申込み)

※申込みは終了しています。

奥山清行　プロフィール

1959年山形市生まれ
工業デザイナー 。Ken Okuyama Design代表。
武蔵野美術大学卒業・米国Art Center College of Design卒業
ゼネラルモーターズ社、ポルシェ社にてチーフデザイナー、
ピニンファリーナ社デザインディレクター、
Art Center College of Design工業デザイン学部長を歴任。
代表作にエンツォ・フェラーリ(2001年)、
マセラティ・クアトロポルテ(2002年)、
フェラーリ・スカリエッティ(2003年)などがある。
ピニンファリーナ社(伊)在籍中はデザイン総責任者としてフェラーリやマセラティなどの自動車、ドゥカティなどのオートバイ、電車、航空機、船舶などをデザイン。

現在は自動車を含む各種工業デザインのほか、家具、KEN OKUYAMA レーベルにて眼鏡、ロボット、テーマパーク等幅広いデザインを手がける。

グッドデザイン賞選考副委員長、
アートセンターカレッジオブデザイン客員教授(米国)、
中央美術学院客員教授(中国)、多摩美術大学客員教授、
金沢美術工芸大学客員教授、名古屋芸術大学特別客員教授、
山形カロッツェリア研究会主宰、山形工房代表。

2007年「フェラーリと鉄瓶」出版(PHP研究所)
2007年「伝統の逆襲ー日本の技が世界ブランドになる日」出版(祥伝社)

アート&デザインセンター

11 EXHIBITION → SCHEDULE 2008 2

展覧会スケジュール

Open 12:00ー18:00
(最終日は17:00まで)
日曜・祝祭日休館
12/22[土]ー1/6[日]は冬期休館。

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。

2007年度企画展 奥山清行展
「フェラーリから鉄瓶までーそしてこれから」

11/ 3土→11/20火	
11/24土→11/28水	洋画大学院＋教員展
11/30金→12/ 5水	幼稚園児たちのゲイジツ展
12/ 7金→12/19水	名古屋芸術大学後期交換留学生展
12/14金→12/19水	造形科工芸選択コース作品展
12/22土→ 1/ 6日	冬期休館
1/ 7月→ 1/11金	日本画3年作品展
1/15火→ 1/19土	JAGDA新人賞受賞作家展2007
1/29火→ 2/ 8金	AFTER REMISEN#9 近藤千鶴＋早川知加子展

Art & Design Center

名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

Ble　Vol.18
発行日　2007年10月31日
編　集　江坂恵里子(アート＆デザインセンター)
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326(代表)
Tel/Fax. 0568-24-2897(直通)
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人(サンメッセ株式会社)
印　刷　サンメッセ株式会社
2007 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合

名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるが下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合

名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2007 Vol.18
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 enjoy design

「秋、デザインがおもしろい」

カーデザインの夢工場

自動車はとても便利な道具でほとんどの人が毎日のように利用していると思います。それは人によっては日々の衣服と同じくらい身近なものであり、友達やパートナーであり、宝物であったりします。けれども残念なことに自動車のデザインがどのように生み出されているのか、どこでどんな人たちがデザインしているのかあまり知られていません。企業も経営戦略上、重要な機密事項として詳細を公開していません。でも、実はその秘密の職場こそサンタクロースのおもちゃ工場のように、楽しくて面白い、デザイナーを夢中にさせる夢工場なのです。

私が企業のデザイナーだったころ「絵を描いて遊んでいるだけで仕事になっていいな」とよく声をかけられました。皆さんもカーデザイナーはスケッチを描く人、というイメージを持っているかもしれませんが、それは仕事のほんの一部でしかありません。

自動車のデザインはスケッチが完成した後、1／5縮尺モデルや、最近はCGの映像などを作ります。さらに、すべて1／1モデル、つまり本物とまったく同じ大きさの、粘土のモデル（クレイモデルといいます）を作ります。トラックだろうが、オートバイだろうが例外はありません。このモデルは造形を考えながら色々な形を試し、検討を加え何度も変更しながら魅力的な形に作り上げます。これをデザイナーとクレイモデラーと呼ばれるモデル制作の専門家が協力して作るのです。これこそがサンタクロースの夢工場です。

ここでは、ほかにもシートやダッシュボードなどのインテリアをデザインするグループ、色のコーディネートやファブリックなどの素材をデザインするカラーグループ、次の商品の計画を練る企画グループ等など大勢のスタッフが夢を形にしています。

私もスズキでカーデザイナーとして25年間働きました。主にエクステリアデザインと呼ばれる外観のデザインを担当し、50台以上の車をデザインしました。それらは1000万台以上生産され、いまも世界中を走り回っています。夢工場で作り上げた車たちが世界中を走り回るのです、こんな素晴らしい仕事はありません。

今、私は名古屋芸術大学でインダストリアルデザイン、特にカーデザインを中心に教えていますが、できるだけ多くの学生にこの楽しい仕事を伝えるのが一番の目標です。

今年は世界的なカーデザイナーで友人でもある奥山清行氏を特別客員教授として招聘し、学生の指導とともに講演会と展覧会を開催することになりました。展覧会には、なにやら特別の出し物も登場しそうです。カーデザインの秘密の味が少しでも伝わることを願っています。

デザイン学部　准教授　片岡祐司

斉藤美貴「PRISM　SOLE」　宮田真美「図書館レンタルバック　本 to Kids」

特集 enjoy design

「秋、デザインがおもしろい」

今年も本学デザイン学部インダストリアルデザインコースから参加。

「第２回 "金の卵" 学校選抜 オールスターデザインショーケース」
2007年8月30日―9月9日
アクシス ギャラリー／東京

和田 義行 プロダクト＆スペースブロック インダストリアルデザイン選択コース 教授

デザインの未来を担う「金の卵」を一堂に紹介し、デザイン教育の現況を知るとともに学生と企業を結びつける場となる展覧会「金の卵 学校選抜オールスター デザイン ショーケース」が昨年に引き続き東京六本木アクシスギャラリーで開催された。

卒業制作は、学生にとって集大成となるものだが、残念ながら社会につながるきっかけになることはほとんどない。卒業制作に先立ち、これから就職活動に入る3年生（プロダクト、インテリア、情報デザイン）を対象とし、全国16校から選抜された作品、約40点を展示。3年生とはいえ、その純粋な視点と発想には「金の卵」の資質が隠されている。また、各校から10名ずつ、約160冊のポートフォリオを自由に閲覧できるライブラリーも設置された。本企画は、これから社会にはばたこうとする「金の卵」たちの励みとなり、さらには今後のデザイン界のレベルアップに大いに貢献できるものであると、確信した。

本学デザイン学部デザイン学科インダストリアルデザイン選択コース 3年生から選抜した2名の作品

宮田真美「図書館レンタルバック　本 to Kids」
子供の自主性を伸ばすプロダクトをテーマに、子供が図書館から本を借りる事が楽しくなるバックの提案

斉藤美貴「PRISM　SOLE」
外反母趾、内反小趾、扁平足、いずれも近年、子どもに多く見られるようになった足の病気を目に見える分かりやすい形で子どもの状態を表すことが出来れば親がこうした病気を発見する手助けになるのではないかと考え、足に関連していて尚かつ目に見える変化を持つ靴底をデザインすることでこの問題にアプローチした作品

※この様子は、デザイン雑誌「AXIS」11号にも掲載されています。

この秋のデザイン関連イベント

東京

□東京デザイナーズウィーク
2007.10.31[水]―11.4[日]
メイン会場：明治神宮外苑（東京 青山）
「100% Design Tokyo」「コンテナ展」「学生展」「ブリックファング」「ジャパンブランド」からなる今年で22年目のデザインイベント。

100% Design Tokyo
2007.10.31[水]―11.4[日]
明治神宮外苑（青山）
http://www.100percentdesign.jp
1995年にロンドンの小さな仮設テントからスタートしたコンテンポラリー・インテリアデザインの国際見本市100% Design。現在ではもっとも影響力を持つ見本市に成長した。
2005年から100% Design Tokyoとして東京でも開催されるようになり、東京発のデザインとして注目を集めている。

「Spain Playtime」
2007.10.31[水]―11.4[日]
スペイン大使館ほか
http://spain-playtime.com/
靴×クリエーション、スペインデザインなど現代スペインの革新的なパノラマヴィジョンを多数の展覧会とレクチャーなどで紹介する。

□Design Tide in Tokyo 2007
2007.10.31[水]―11.4[日]
メイン会場：国立霞ヶ丘競技場
http://www.designtide.jp
今年で3回目となるインテリア、グラフィック、ファッションやアートを中心としたトレード・ショー。多数の展覧会やマーケット、プロジェクトイベントが開催される。

□DESIGN TOUCH
2007.10.31[水]―11.4[日]
東京ミッドタウン（六本木）
http://www.tokyo-midtown.com/jp/event/
今年オープンした東京ミッドタウンのさまざまなスペースで開催されるデザインイベント。デザインを楽しむためのカンファレンスや国内外のデザイナーによる企画展、レストランやショップでも関連イベントが行われる。

□佐藤卓ディレクション：water
21_21 DESIGN SIGHT
～2008年1.14[月]
東京ミッドタウン内
http://www.2121designsight.jp/

名古屋

□Designer's Week in Nagoya 2007
2007.10.18[木]―10.29[月]
国際デザインセンタービルほか
http://www.da-dwn.com/
今年で3回目を迎えるデザイナーズウィークインナゴヤ。デザイン都市名古屋から産業・デザイン・生活を中部から世界へと発信。

□「一脚の椅子を求めて」
― 名古屋芸術大学 × 株式会社天童木工 ―
2007.10.23[火]―11.5[月]
7th Café ナディアパーク 7F
名古屋芸術大学と株式会社天童木工による産学共同プロジェクトで共同開発した教室用椅子を中心に展示する。

□IdcNデザインミュージアム特別企画
カミヤ＋イナモト
デザイナー神谷利徳とプロデューサー稲本健一展
http://www.idcn.jp/kamina
空間デザインの分野で近年ひときわ意欲的な活動を見せるクリエイター2人のコラボレーション展。テレビ塔「タワーレストランナゴヤ」、「ガーデンレストラン徳川園」など、当地域の話題作のほか国内外で活躍するデザイナーとプロデューサーの創造力、デザイン力を紹介する。

世界のデザインミュージアム

海外

ヴィクトリア＆アルバート美術館　ロンドン（UK）
http://www.vam.ac.uk/

デザインミュージアム　ロンドン（UK）
http://www.designmuseum.org/

デザインミュージアム　ゲント（ベルギー）
http://design.museum.gent.be/

ヴィトラ・デザインミュージアム（ドイツ）
http://design-museum.de/

デザインミュージアム　ヘルシンキ（フィンランド）
http://www.designmuseum.fi/

ミュンヘン現代美術館　デザイン部門（ドイツ）
http://www.die-neue-sammlung.de/z/muenchen/blick/enindex.htm

ニューヨーク近代美術館　デザイン部門（USA）
http://www.moma.org/

ポンピドゥセンター（フランス）
http://www.centrepompidou.fr/

国内

JIDAデザインミュージアム・ウェブ
http://jida-dm.syncline.jp/

国際デザインセンター内デザインミュージアム 名古屋
http://www.idcn.jp/

21_21 DESIGN SIGHT　東京
http://www.2121designsight.jp/

注目のデザインアワード

グッドデザイン賞
http://www.g-mark.org/

ダイソン　デザイン　アワード
http://www.dysondesignawards.com/

MUJI AWARD
http://www.muji.net/award/

レビュー REVIEW レポート

新任教員展2007
2007年7月6日 – 7月11日
名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

創作者たちの立ち姿

“教員であること”と“創作者・研究者であること”の立ち位置は、ここ芸術大学においてはほぼ一致するハズである。

2004年度以降に着任された教員による作品展。まずは美術学部からは、**マイケル・シャイナー**先生と**吉本作次**先生。新任とはもう言えない経歴のお二人だが、作品は新鮮!!シャイナー先生の新作オブジェは、空気をはらんで形成されたガラスがいかに重力と関わるかという、技法と素材の根源を顕示していた。守谷技術員による精美な台座の上に、一対のそれは軽やかに宙に浮いた。吉本先生は、1985年作300号の大作をド～ン!と出品。ニューペインティングの寵児として注目されながらも、制作に苦闘する当時の吉本青年を彷彿とさせた。大胆な構図と荒々しい筆致による十字架像。作品は、時を超えてまた作家自身に向き合っているようだ。

デザイン学部の若手、**永井瀧登**先生はグラフィックの実践例と、清明なイメージ展開を密度高く提示。自動車デザインの実務者としてのキャリアをモデルカーで示されたのは、**片岡祐司**先生。デザインの行程をふまえて細部を間近かに観察、参照できる貴重な機会となった。一方、社会につながるメディアデザインの実例としては、**樋田珠実**先生の自作とそれを表紙に用いた書籍の提示が興味深かった。その端麗な世界観はそれ自体で完結した美術作品であるが、さらに別の作品世界が拓かれている好例である。また創作という意味でも出色であったのは、**駒井貞治**先生の建築プレゼンテーション。模型や資料を組み入れた架設構築は、労作でありながら柔軟で軽妙な味わいの取り組みであった。最後に駒井先生と同様、現場制作で昼夜奮闘されたのは、**扇千花**先生。布や紙などのテキスタイル素材を用いて、空間そのものを作品化することで知られる扇先生。艶やかに空気や光と戯れる、虹色の天蓋が創出された。人の気配や光の変化によって、場の“ゆらぎ”を醸す意欲的な新作となった。

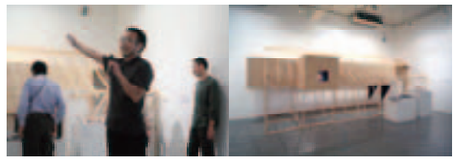
こうして７人の毅然とした創作者たちの立ち姿がくっきりと見いだされ、まさに生きた“芸術教育の現場”を実感できるものとなった。

美術学部美術文化学科准教授　高橋綾子

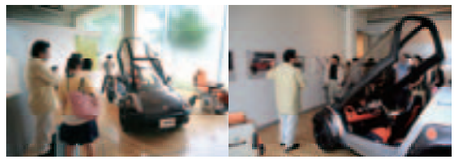
マイケル・シャイナー
美術学部造形科
ガラスコース教授

吉本作次　美術学部絵画科洋画コース教授

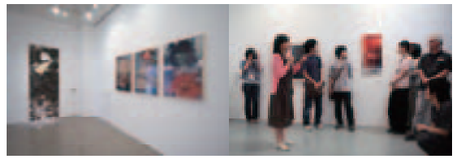
扇 千花
デザイン学部デザイン学科テキスタイルデザイン准教授



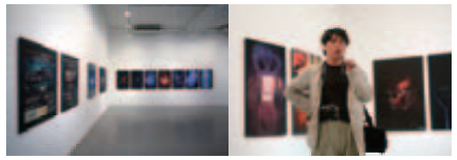
駒井貞治
デザイン学部デザイン学科
スペースデザイン講師



片岡祐司
デザイン学部デザイン学科
インダストリアルデザイン准教授



樋田珠実
デザイン学部デザイン学科
メディアコミュニケーション准教授



永井瀧登
デザイン学部デザイン学科
ヴィジュアルデザイン講師

RELAY ESSAY

「若者ことばと言語学」…… 早川知江

若者のことばが乱れている、とか、最近の若者は言語能力に乏しい、という指摘をよく耳にします。私の専門は言語学なのですが、周囲の人から、「今時の人は正しいことば遣いを知らないから、あなたの専門分野がますます重要になりますね」と言われることもあります。

確かに、若者の間では新しい表現がどんどん作られる一方で、従来のことばの決まりが無視され、忘れられていく傾向にあるようです。H/K/(＝話し変わるけど）や K/Y(＝空気読め）のような耳慣れない表現が流行るかと思えば、「ら抜きことば」などに見られるように、昔からのことばの決まりは消えていきつつあります。そうした「乱れた日本語」を批判した言語学の本もたくさん出版されています。

しかし、言語学を専攻している人が皆、「正しいことば遣い」を教えることを目指しているわけではありません。言語学には、「正しいことば遣い」を教える言語学と、そうでない言語学がある、と言った方がいいかもしれません。専門的には、前者は、「規範文法」と呼ばれる、正しい話し方・書き方はかくあるべきという規則を想定し、それを守らせようとする言語学です。後者は、「記述文法」と呼ばれる文法を書くことを目指し、正しい・正しくないという判断抜きで、実際に使われていることばのありようを観察し、そのしくみをありのままに記述しようとします。

記述文法の視点から見ると、新しいことばの使い方は、言語システムを豊かにし、意味の可能性を拡げる重要な資源だといえます。実際、ら抜きことばは、尊敬と可能の用法を区別できるようにした画期的なことばの変化だという説もあるくらいです（「起きられる」では、敬語なのか、「起きることができる」の可能の用法なのか不明ですが、「起きれる」と言えば必ず可能の用法だからです）。

いずれにせよ、言語は必ず変化していくものです。それが、ことばが生きている証です。生きている言語の力と可能性を示すのが、言語学の大切な役割だと思っています。

美術学部教養部会 講師